

1930、40年代の舟山(沈家門)人形芝居の上演実態

—木偶芸人鄭明祥の話から見る—

毛 久 燕

はじめに

中国浙江省の舟山群島は大きく2区⁽¹⁾(定海・普陀)2県(岱山・嵎泗)に分けられる。(舟山略図を参照)一番大きい島である舟山本島は定海区と普陀区に分かれる。舟山政府の所在地である定海区は西側に位置し、山地が多く昔から農業をする人が多い。普陀区は東側に位置し、漁業や商業が盛んである。特に中心地となる沈家門は、中国最大の天然漁港として広く知られている。舟山の指遣い人形芝居(=木偶戯)は、清の末期に大陸の寧波からこの二つの地域に伝わったと言われている。現在も廟会や願解き、結婚式、出産祝い、老人の誕生日などで、上演されている。

1930、40年代は舟山の指遣い人形が特に盛んに行われていたと言われるが、記録がないので、当時の状況についてはほとんど分からない。本稿は沈家門出身の木偶芸人の鄭明祥(1929 - 2014)に、聞き取り調査したものを整理した⁽²⁾。

一、木偶芸人としての鄭明祥の生涯

話者の鄭明祥は、最初舒明祥と言った。父の舒田昭は大工で、原籍は舟山の普陀区沈家門であるが、上海でマホガニーの家具店を経営していた。店は上海湖州路27号にあり、二階建てで、下が店で、上で家族が暮らしていた。鄭明祥は1929年にその家で生まれ、家には母の張金花、5歳年上の兄の舒明財の四人家族がいた。3才⁽³⁾の時に、大病をして脚に障害が残った。

1932年の上海事変で一家は沈家門に戻った。半年後、父は生計のため、単身でまた上海に行った。しかし、三年後経営不振で店は倒産、父は精神に大きな打撃を受け、黄浦江に身を投げて自殺した。沈家門にいた母は臨時雇いをしながら、息子を育てていたが、夫の死で生活が維持できなくなり、二年後、鄭明祥が9才のとき、鄭昭娣と再婚した。

継父の戸籍に入った鄭明祥は、その後、沈家門の司湾廟にある私塾に一年半通った。11才の時、弟が生まれたので、私塾をやめ、家を手伝いながら父に二胡を習った。父は專業木偶芸人だった。元々は「灘簧」⁽⁴⁾をやっていたが、1920年頃、主演一人に伴奏二人がつくという三人でやる人形芝居が盛んになったのに伴い、人形を遣い始めた。当時、沈家門では「曲芸傀儡協會」(6-7頁参照)が成立し、父もそこに加入した。鄭明祥は14才の頃から、父に従ってしばしばその協会に通い、人形芝居の技や楽器の遣い方などを、そこにいる芸人たちから学んだ。鄭明祥は特に二胡を弾くのが得意だったので、協会の「唱班」(6-7頁参照)に加わって二胡を弾いた。

15才の時、沈家門に移住してきた定海白泉出身の木偶芸人の周章に弟子入りした。翌年には、また正式に楽器を習うために、「唱班」にいた沈家門出身の潘如明(1909年生)に弟子入りした。一年後、人形芝居の舞台を父に用意してもらい、独立して木偶戲班(=人形座)を作り、班主(=座長)となった。その後、專業木偶芸人として舟山の各地で巡回上演をした。

共和国成立後の1952年、鄭明祥の木偶戲班は個人戲班「友好木偶劇団」という名前で沈家門の文化館に登録した。1958年5月、定海の「潘渭漣木偶劇団」の潘渭漣、顧全林と連携して「定沈聯合木偶劇団」を設立し、3ヶ月ほど沈家門で上演した。(毛久燕 2014)

当時、中央の反右派闘争の影響を受けて、民間では解放前の活動についての告発行動が盛んに行われたが、鄭明祥は解放前に国民党軍人に二胡を教えたことと、知人の紹介で一ヶ月ほど国民党軍の情報諜報活動に関与したという二つの経歴を政府に告発され、1959年1月24日から1962年1月23日まで三年間は「管制」された。「管制」というのは、収監されるわけではないが、移動の自由の制限や選挙権剥奪などである。そのため、1959年政府が組織した集団化の定海「東昇木偶劇団」にも参加できなかった。1961年後半に弟弟子であった潘渭漣の紹介でようやく「東昇木偶劇団」に加入したが、劇団の正式な団員としては認められなかった。(毛久燕 2014)

1965年、文化大革命が始まる直前、「東昇木偶劇団」はすべての上演が禁止され、鄭明祥も沈家門に帰された。沈家門は漁業が盛んなので、家族と共に網を編むための梭作りの仕事を見つけ、露店を開いた。文革中、所有していた舞

台や道具などはすべて紅衛兵に燃やされた。

改革開放後、人形芝居の上演が再びできるようになった。舟山では政府管理のもと集団化の新放木偶劇団が設立された。当時、鄭明祥は主演として劇団に参加し、舟山各地、また寧波、奉化などで上演を行い、1984年解散まで活動した。その間に多くの弟子を取った。今、舟山人形芝居の代表を務める侯雅飛（1952生）も当時の弟子の一人である。劇団解散後、弟子たちと個人戯班を再開し、主に沈家門一帯で上演を続けてきた。2000年以降、高齢のため主演から楽器の伴奏に移った。2013年に仕事を止め、家で弟子のために上演用のテキストを書いたり、人形の服や帽子、道具などを作ったりしていたが、2014年12月、死去。

二、鄭明祥から聞いた話

1、弟子入りの話

私は小さいころから足が不自由で、15歳の時、父の勧めで木偶戲を習い始めた。木偶戲を学ぶなら、14、5歳が一番いい年で、素直に勉強できるからだと父はこのように言った。

木偶戲を学ぶときには、自分の親が木偶芸人であっても他の芸人に弟子入りする必要がある。これは我々の職業の決まりである。弟子入りをしなければ、どんなにうまくできて「旤師父」（師匠がいない）の芸人だと呼ばれ、馬鹿にされる。

父が選んでくれたお師匠さんは白泉出身の木偶芸人の周章であり、当時は沈家門に住んでいた。周章は父と同じ「曲芸傀儡協會」に入っていた。

弟子入りの儀礼はとても重要だった。初めてお師匠さんの家に行く時、私は二つの「包頭」^⑤を持って行った。一つには干した竜眼、もう一つには干したライチが入っていた。「包頭」を二つ送るのは、お師匠さんと奥さんへの2人分という意味である。そして、お師匠さんは「包頭」を一つだけ受け取って、一つは礼を返すという意味で返してくれた。しかし、片親なら、礼を返す必要はない。なお、毎年、端午の節句には粽、中秋節には月餅、正月には「包頭」を送ることになっている。

弟子入りをしたら、協会に報告する。

「これは私の弟子だよ、面倒を見てくれるか？」とお師匠さんは同業者たちに言った。

協会の同業者に知らせないと、一人前になっても、「抓同行」ということをされる。「抓同行」というのは、舞台や道具箱などをすべて奪うこと。つまり、お前の上演は認めていないから、やめろということである。解放前は、木偶芸人の中でこの決まりが厳重に守られていた。

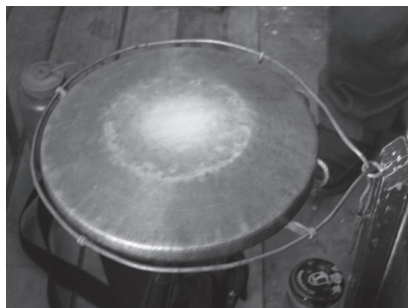
弟子入り期間は三年である。その間は報酬がない。うちはお師匠さんの家に近かったから、普段通う必要はなく、芝居があれば、お師匠さんが私を呼びに来る。お師匠さんの戯班には、私を含め四人いた。「前台」（主演）はお師匠さんで、2人の「後台」（伴奏）は臨時に雇った者であった。一人が主伴奏で小鼓、小鑼、二胡と唢呐を担当し、もう一人が副伴奏で三弦と大鑼、鈸を担当する。私は鼓板⁽⁶⁾を打つのを担当し、お師匠さんの上演を手伝った。時々二胡を弾くこともあったが、十分な自信がなかったため、小さい音で弾いた。お師匠さんは暇があれば、指導もしてくれたが、私の場合は父も木偶芸人だから、人形の遣い方についてはほとんど父から教えてもらった。上演に出かけると、昼食は人形芝居を頼んだ家が招待し、夕食は家に帰って食べた。このように、お師匠さんに従って上演したのはおよそ半年ぐらいだった。翌年、「唱班」の潘如明のところへ弟子入りして楽器の修業もした。

【参考】

* 人形芝居の伴奏に使う楽器：



(小鼓)



(小鑼)



(二胡)



(唢呐)



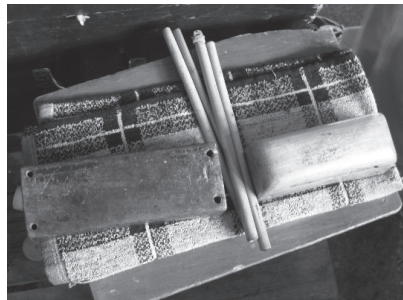
(三弦)



(大鑼)



(鈸)



(鼓板) 左：的板 右：篤板

* 2009年9月6日舟山の定海区壇聚廟で侯家班上演の様子、新入門の侯夏玲は伴奏のおじたちの横で「鼓板」を叩いている。瀬田充子撮影。



(主演)



(伴奏)

2、「曲芸傀儡協会」と「唱班」

普陀区沈家門では1920年代に地元の木偶戲班が集まって「曲芸傀儡協会」が成立した⁽⁷⁾という。1940年代に活動が最も盛んであったというが、解放後解散した。ここで言う曲芸とは弾き語りのことで、「唱班」の活動を指す。協会には13⁽⁸⁾の木偶戲班が加入しており、木偶芸人たちは借りていた事務室にたむろしていた。舟山本島の定海や沈家門のほか、小さい島の人たちが芝居を頼む時は、ここにやって来た。

事務室の壁には13枚の竹の札が掛けてある。それは13の戲班を表す。竹の札には班主の名前が書いてある。竹の札の順番は、上演順でもあり、先に事務室に着いた人が先に上演する。一番目の戲班が出ると、その札は最後に置く。それで、二番目の戲班が一番目になる。13枚の札はこのように回されていく。このようなやり方は「輪籌出戲」と呼ぶ。芸人たちは毎日夜が明けるとすぐ事務室に行って早い出番を取るために待っていた。もし用事があって、途中で席をはずすと、その札は最後に置かれる。事務室で出番を待つ間に、芸人たちはお茶を飲みながら、雑談をしたり、技を研究し合ったり、のどを訓練したりし

ていた。協会には、給仕が雇われていた。給仕の給料とお茶代は、上演が終った戲班がもらう上演料から少しずつ出すのが決まりだった。

夕食の後は、13の木偶戲班が13の「唱班」に早変わりする。「唱班」は伴奏しながら歌う弾き語りである。その営業は輸送用の小船を借りて、沈家門港から魯家峙まで（200 m）の海上で行う。「唱班」の小船は海を繰り返し回る。芸人はそこで楽器を弾きながら、客を呼ぶ。

私は14、5才の時、父の代わりにしばらく「唱班」に加わった。当時、運輸の仕事をしていた兄が船頭で、私は二胡の伴奏であった。その他に、語り手、鼓板を叩く人、瓜子（つまみの瓜の種）を売る人がいた。その三人とも若い娘であったが、瓜子を売る若い娘は、瓜子を売ることを口実に、身を売る。船の中には神様がいるので、出鱈目なことはできないので、翌日その娘の家に行くことを約束する。このような営業のため、けんかなどの事件が起きた時には、権力を持つ人の後ろ楯が必要だった。当時、協会を管理したのは国民党の士官を務める王宝金だった。協会には木偶芸人のほか、40人の若い娘がいた。その人たちは沈家門では金が儲かることを知って、農村から集まって来た。当時の沈家門港には、国民党軍や日本軍、地元の漁民や福建省からの漁民などがいて、大漁の季節になると、大勢の人が集まって来た。当時、小さな沈家門には上海の賑やかさがあるとされた。

3、門づけで仕事する木偶芸人

我々の仕事は本来は一軒一軒訪ねて芸を売る商売で、昔から「吃開口飯」（語りで飯を食う、門付け）と呼ばれ、とても卑しい仕事だった。上演中に言い間違いをすることは、少しでも許されない。芝居の内容を間違えるのはもちろん、芸人自身の名前を言い間違えることもできない。観客は注意深く芝居を見ているため、少しでも間違えると、すぐに気が付く。大騒ぎになれば、観客に謝るしかない。ときには、芝居1回を罰として無料で上演した。こういうことがあるから、観客は面白がって、注意深く私たちの上演を見ていた。一方、私たちは衆人の前に身をさらすから、自らの言動に注意し、粗野なことやいいかげんなことは言えない。

ある時、大榭島では『李太后回朝』⁽⁹⁾の上演を頼まれた。しかし、この芝居

はあまり上演しないので、私は物語を急に思い出せなくて断った。その晩、私はその芝居の内容を必死に思い出した。何日かのちに、別の村落から来た人もこの芝居を頼んできたので、私は承知した。上演当日、最初に頼んできた客もそこに芝居を見に来ていた。すると、その人は、

「この芝居は私が頼んだときは断ったのに、ここでは上演するのか」と怒った。誤解を解く暇もないうちに、その人は手で私が持っている大鑼を叩いた。大鑼が古くて真ん中に穴があいていたので、その人の指が穴に突き刺さって、流血の騒ぎになった。最後には、「当頭人」⁽¹⁰⁾の説得で、そこで上演した後、向こうの村にも上演しに行き、その1回目は謝罪として無料で上演することに決めた。

我々は「曲芸傀儡協会」に注文が入ってから上演に出ていくのが普通だったが、自分から桃花島や六横島、蝦峙島、泗礁島、普陀山などの島に行つて注文を取る場合もある。

島に着くと、私たちはその島の最もにぎやかな場所に舞台や道具箱などの荷物を置いておく。上演料を聞きにくる人がやってくると、私は「今夜は無料で、食事と宿泊先があれば十分です。明日の分からお金をいただきます。」と答える。島の人々は芝居を見るのが好きで、サービスもあると聞くと、とても興味を持つ。熱心な人は、みんなで「兜籠戯」をやろうと誘い始める。「兜籠戯」というのは、島(村)の何軒か、或は十何軒の家がお金や食べ物などを集めて上演を依頼することだ。島ではよく「兜籠戯」というやり方で上演した。

しかし、島に行つても注文が取れない時もあった。その場合、島の中を荷物を担ぎながら、山を超えて家を一軒一軒回るのが大変だった。運が悪いときは、一日歩き回つても注文が取れずに日が暮れて、野宿するしかない。運がよければ、無人の小さい廟を見つけて一晩を過ごした。時には持参の食糧もなくなって、空腹のまま早く注文が取れることを祈るしかなかった。注文がないのに、宿泊だけを民家に頼むことはしない。もしそうすると、上手ではないと誤解され、軽視されるからだ。その結果、ますます注文が取れなくなる。

注文を取りに家を訪ねる時は、聞き方がとても大事だった。一般には、事件が起こった家では(厄払いのために)木偶戯を頼む。それで、何もない家に「小戯文(=木偶戯)をしますか?」という聞き方をすれば、不幸をもたらしたよ

うに不愉快な気持ちにさせてしまう。そのため、訪ねた家の事情が分からない時は「兎財戯をやりませんか？」と聞けばいい。これは木偶戯をすれば、金がもうかることを言っているわけだから、尋ねられたほうも喜ぶことになる。

4、人形芝居の上演

(1) 干しイモや卵などを上演料金とする

小さい島の住民はほとんどが漁師である。普段男性は漁、女性は農業をしていた。しかし土地がやせていて、米など農作物の収穫は多くない。そういう小さな島には木偶戯班はほとんどなかった。島で上演をするのは一般に「做島戯」と呼んだ。島の人たちが定海や沈家門に木偶戯班を呼びにくるのは珍しいことではなかった。上演にはほとんど三人組で行った。舟山本島で上演をするときは父と別にそれぞれ伴奏二人を雇っていた。それらの島に行くときは父と一つの戯班を組み、伴奏一人を雇った。

私が上演を始めたばかりの年、蝦峙島の「当頭人」、つまり芝居上演の連絡を担当する人が我々の戯班を呼びに来た。それで、いつ上演するとか、どこで上演するとか、何日間、或は何回上演するかなど様々な打ち合わせを行った。最後に料金を決める時、「当頭人」は言いにくそうに、

「ほら、晩稲を植えたばかりで、島の人々は今、手元にお金がないので、料金は晩稲⁽¹¹⁾で払ってもいいか？一人一日一斗（12.5kg）の目安で、舞台の分も半斗で計算する…」と言った。

もしそうすると、一日上演したら、私と父二人なら、二斗半の粳米がもらえる。三日間⁽¹²⁾上演するなら、七斗半の粳米がもらえる。これは悪くない。そう考えて、父はすぐに蝦峙島での上演を承知した。島に行くとき、私と父は一つの舞台を持っていく。島で上演するには三人が必要で、私は人形遣い、父は伴奏するので、ほかにもう一人の伴奏を雇う。

しかし、粳米で払うと言っても、すぐにはもらえない。晩稲はまだ田んぼで成長している最中だ。収穫した後、はじめてもらえる。当時、島民は信用できたから、収穫後、運送業者⁽¹³⁾の兄が蝦峙島に行って、約束通りに、すべての粳米を受け取った。脱穀してみると、赤い色の「花紅米」⁽¹⁴⁾で、香りもいいし、

おいしかった。しかし、うちではそんなに多くの米は必要ないので、隣人にその米を市価よりも少しやすく売った。

その仕事を担当するのは、地元の「当頭人」であった。米や干しイモなどを集める量が多い場合は、三四人の「当頭人」が必要だった。「当頭人」らは麻袋を持って一軒一軒回って食べ物を集める。これはまるで地主が年貢を取り立てるようだ…（笑う）。上演期間は三日以上、十日や半月ということもよくあった。

ある時、桃花島の「当頭人」がうちにきて、「兜攏戯」をすることについて打ち合わせをした。桃花島は山地が多く、さつま芋をたくさん植えていた⁽¹⁵⁾。それで、芝居の料金は干しイモで払い、100kgで一日上演分とした。「当頭人」は既に300kgの干しイモを集めたと私に伝え、「まず三日間上演してね」と言った。言い換えると、三日間の上演が終わったら、また続けてやる可能性があるということだ。演目を聞いたら、「当頭人」は「何でもいいから、賑やかな芝居をやってほしい」と答えた。

「賑やかでおめでたいものなら、少し長く演じてもいいか？」

「いいです。」

最後に私たちのほうが演目を決めた。

すべての相談がまとまると、上演場所を知らされた。翌日、我々は舞台や道具箱を担いで、船で島に行った。上陸して、上演場所を聞いたら、すぐ分かった。島が小さいから、どこで上演があるのか、上演の予定があれば、島中に知れ渡る。

そこに行ったら、私たちのために、舞台を立てる戸板と腰掛がちゃんと用意されていた。私たちは道具箱を戸板の上に置いて、舞台を立て始めた。道具箱の側面に天秤棒を突き刺して、それから幕を上と下に掛けて、道具や人形を置く袋状のものを付ければ、完成する。舞台を立てると、遣う人形を用意する。また、衣装や帽子を着せたり、道具を用意したりした。

【参考】

* 舞台の組立：2014年8月舟山礮山島の財神廟での侯家班の舞台設営。



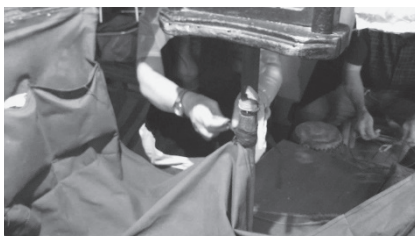
① 道具箱を戸板の上に置く。



② 道具箱の側面に天秤棒を突き刺す。



③ 幕を上と下に掛ける。



④ 道具や人形を置く袋状のものを付ける。



⑤ 「罩檐」（天蓋状のもの）を掛ける。



⑥ 完成。

三日間上演しても、まだ芝居は終わらない、続けてやるためにまた干しイモを集める。

干しイモを集めるほかに、卵を集めることもある。卵二個で芝居1回分、つまり三四時間の芝居になる。その当時は、卵がとても貴重なものだったので、お酒やタバコも卵で買うことができた。

何日上演するのかは、一般に先に決めたが、例えば三日間上演した後、更に

延長する場合もしばしばあった。

ある時、私たちは嵯泗列島の花鳥島で上演した。島民は三日分のお金を集め、『薛剛反唐』⁽¹⁶⁾という芝居を望んだ。しかし、この芝居は三日間では終わらない。

三日目、私はお客さんに言った。

「この芝居はたぶん半分までしか上演できない…」

「これは駄目だ、やめないで…」

「でも今日は最後の一日だ、今日やり終えたら、どうするか？」

「心配しないで、お師匠さん、私たちはもう1回集めてくるね。それで、あと三日間やれば、終わるの？」

「それは分からない、なるべく最後までやる。もしお金が集まらないなら、芝居の賑やかではない部分を端折って、最後まで演じようか。」

「そんなのは駄目だ。」

その時、一人の人が立ち上がって、

「じゃ、三日分は私が引き受けよう」と言った。

結局、十五日間続けて上演した。

芝居を上演するお金は、たくさん家から集めるが、戯班の食事各家が順番に担当した。近所の人みんな食事の担当になった家にやって来て、どんな料理があるのか、お互いに比較した。宿泊はその晩食事を提供した家が責任を持つ。我々は自分で布団を持っていったが、招いた家がすべて用意してくれた。

小さい島では「賭戯」もする。農閑期および、休漁の期間、人々はする事がないと、賭け事をした。勝った方は儲けた金の中から少し出して、小さな口を開けた竹筒に押し込むのが決まりだった。このように貯めた金は「撮頭」「撮頭鈿」と呼ばれた。ひとつまみという意味だ。その金を木偶戯の上演料に使うので、「賭戯」と呼んでいた。賭博場での上演は、三日間以上の長い連台戯も一日だけの短い単本戯もある。時には、勝者が単独で金を出して、一日の上演を頼みに来ることもあった。

(2) 願解きから娯楽へ

舟山の人々は、願が叶ったら、木偶戯を上演する習慣がある。漁民の場合は、漁の安全や豊漁、農民の場合は豊作を祈願する。また難産や火災、病気、家族

の離散などがあつた時に、それらを無事に乗り越えるための祈願もある。島民たちは、このように様々な理由で木偶戯を神様に奉納する。特に難産、火災、海賊に襲われそうになった時に、祈願して木偶戯の上演を約束すると、よく効くと言われている。

解放前、舟山にはたくさんの海賊がいた。夜になると、財物を狙って漁船を襲う。ある時、沈家門外道頭の漁民は海賊の船に襲われそうになった。船長は仕方なく甲板に跪いて、「神様、この災難から逃れさせてくださったら、小戯文を奉納いたします」と祈った。不思議なことに、海賊の船は急に方向を変えて離れていった。港に戻るや、船長は泥だらけの足のまま真っ直ぐに私の家を訪ね、「早く一緒に来てくれないか…」と言った。

「1回いくらにするのか」と私は聞いた。

「いくらでも構わないから…」

そうして、値段も相談せず、外道頭のある廟で木偶戯を上演した。

願解きは一軒の家で金を出すのが普通なので、その理由で上演する木偶戯は「個人戯」「老板戯」⁽¹⁷⁾とも呼ぶ。しかし、時には何軒かの家で一緒に頼むこともある。頼む人は隣人や親戚などの場合が多いので、お互いに相談して、時間を決めて木偶戯班を呼ぶ。

私は沈家門で十五軒の家から頼まれたことがある。その時は、一軒一軒を順に回って十五日連続で上演した。お金はその十五軒が別々に払ったが、芝居はみんな一緒に見ていた。ある年、私と父は六横島で一日3回、八ヵ月連続上演を行った。朝、日の出から10時ごろまでが1回目、昼ご飯が終ってから午後三時ごろまでが2回目、休みを取ってからまた上演が始まり、日暮までが3回目だった。時々2回目をやらない場合もあった。

願解きをする時には吉兆を求めため、「両頭紅」という習慣がある。これは上演の最初と最後に空が赤く染まることだ。即ち、朝焼けで始め、夕焼けで終えるという習慣である。

ある時、秀山島の鄭家畧のある老人が、昔掛けた願を解くために戯班を呼びに来た。その老人は船で沈家門に上演を頼みにきて、自分が何年前に経験し

た事件について話した。鄭家畧はすべて漁民で、ほとんどの家は漁船を持っていた。老人親子は、当時一緒に漁をしていた。ある時、台風に襲われて、漁船は波に巻き込まれ、今にも沈みそうになった。老人は甲板に跪いて、神様に「今回の災難を無事に乗り切れたら、三日三晩⁽¹⁸⁾小戯文を上演します」と祈った。それで、老人親子は無事に戻った。

これは何年前に起きた事件だったが、神様に木偶戯を奉納する約束は守らなければならないと老人は言った。

「お師匠さん、『薛剛反唐』という芝居は上演できますか？」

できるといって、老人は、

「薛剛は唐を討伐し、最後に勝利を得た。この芝居はめでたい結末だから、願解きと合わせて豊漁も祈りたい。」

「準備の都合もあるから、何日上演を頼むつもりか？」私は聞いた。

「三日。」老人は言った。

「三日？『薛剛反唐』は長い芝居だから、どの部分からやってほしいか？」

「「鬧花燈」⁽¹⁹⁾から初めて、三日間やれるところまでやってください。」

この答えに対して、私はちょっと迷った。

願解きは必ず大団円の間まで演じるのが決まりだった。そうしないと、演じる者にも頼んだ者にもよくないと言われている。

しかし、老人はわざわざ船で秀山島からやって来たのに、断りにくいと私は思った。

「じゃ、私たちは「鬧花燈」からやって、三日間やれるところまででやめます。但し、やめる時にめでたくない場面だったら、ちょっとめでたい場面をつければいいですか？」

「それで十分だ。」

三日上演の最後は、やはりめでたくない場面になりそうだった。私は「終わっていないところは短縮しましょう。」と老人に言った。

「短縮しないで…」その場に見に来ていた大勢の人が私の提案に反対した。

当時、老人一家のほか、隣人や隣の村落から老人や子供までみんな見に来ていた。それで、ある人は「兜籠戯」をしようと提案した。みんなはその場で金を集め、三日分がたちまち集まった。それで、芝居はまた三日間続いた。し

かし、三日演じてでも終わらなかった。それに、めでたくないところでやめるとよくないので、どうすればいいか、私はこう提案した。

「今度はやめよう、少し団円の場面を最後に演じるので、これで終わりにしましょう。こちらの家でも出して、皆からも集めたので、これ以上お金を集めるのは無理でしょう…」

しかし、多くの人にはまた反対した。

「それは無理だ、小戯文を途中でやめては駄目だ。」

その時、老人は立ち上がった。彼も続けてみたいから、私に聞いた。

「お師匠さん、正直にあと何日演じれば終わる？」

「正直に言えば、簡潔に演じて、あと六日かかります。」

「よろしい。この六日分は私が出す。」

結局、芝居は合わせて十二日間上演した。芝居の最後は、皇帝が朝廷に出て、薛剛を官に封じる場面だった。観客は大満足で、二籠分の爆竹を鳴らした。

5、戯神

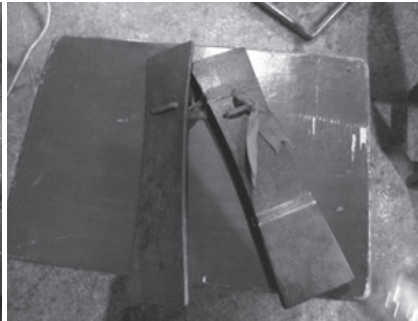
旧暦の十月十一日は木偶戯の神様、「老郎菩薩」の誕生日だと言われている。解放前に、沈家門の木偶芸人は毎年、その日に神様を祭った。その日は舞台を「八仙卓」（四人掛けの四角テーブル）の前に立て、供え物と蠟燭を用意した。供え物は果物、豚の頭、卵、豆腐、豚肉、餅などで、野菜は除く。「老郎菩薩」は野菜を食べないと言われている。

次に、「老郎菩薩」を「八仙卓」に付かせて、服を着せたり、帽子を被せたりする。これは「扮菩薩」と呼ばれた。うちは專業の木偶芸人だから、昔から老郎菩薩の木像を持っている。木の神像を持っていない戯班は、絵や赤い紙に「老郎菩薩」という文字を書いたものでも構わない。「老郎菩薩」の姿は財神と似ているが、その帽子には、二枚の葉っぱのような飾りがあった。

最後に、「三塊」（写真を参照）を神様の左側に置く、これは左手で使うからである。木偶戯班では、「三塊」を一番神聖視して、「老郎菩薩」の象徴と見なし、「泰山」とも呼ぶ。これを持つのも、使うのも班主しかできない。特に女性は触ることもできない。昔は「三塊」を使っていたが、現在はその代わりに鼓板を使う。



(鄭明祥と弟子)



(三塊)

註：「三塊」というのは、は三枚という意味で、右側は二枚の板を重ねている。

定海小沙で上演した時、ある事件が起こった。私は主演、後ろの伴奏は小沙出身の王志裕と王嗣清兄弟、お師匠さんも一緒に行った。普段は三人だが、その時は四人いた。私はなるべく収入を確保しようと、昼間に小沙で上演するほか、夜からは、また別のところに上演に行こうと考えていた。昼間の上演をしたが、最後までいかないので、そこでやめようとした。観客は文句を言い始めた。

「お前たちはこのままで終わらせるのか、それは駄目だ。」

その時、芝居を見ていた肚仙⁽²⁰⁾は言った。

「芝居をここでやめると、お前たちの誰かが必ず（病気などで）倒れるぞ。」

王志裕はこの話を聞くと、真っ青になって、私に言った。

「祥兄さん、どうしよう、やめたら、あの世の悪霊に襲われる…」

そして、肚仙は、

「明日、冥界の幽霊はわざわざ長塗から芝居を見にくることになっているのにお前たちがやめたら、失望して、きっと誰か倒れるぞ。」とまた言った。

王嗣清も恐れ、お師匠さんも身体をがたがた震わせて言った。

「鄭さん、やめると恐ろしい…」

しかし、私はやめると決めて、決然として「やらない、絶対に止める」と断った。

肚仙は呪って、

「お前がやらないと言ったから、倒れるのはお前だ」と言った。

私は怒った。

「いいかげんにしろ、お前は幽霊が来たら私に悪いことをすると言うが、私の後ろに誰がいるか分かるのか？」

「誰がいる？」肚仙は私に聞いた。

「私たち、小戯文をやる人間の後ろには、いつも「老郎菩薩」がいるのだ、見えないのか？」

結局、芝居をやめて、他のところに行った。

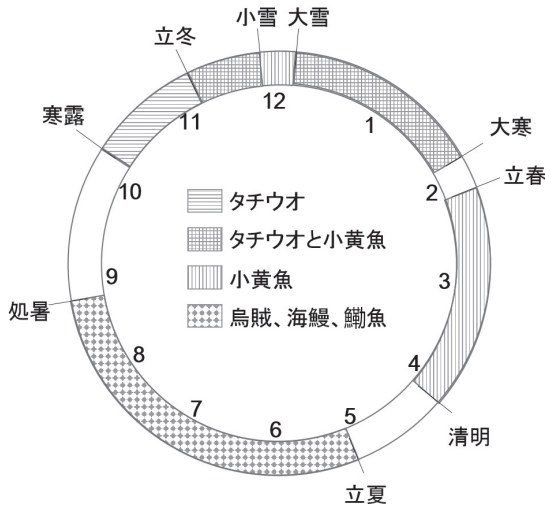
私たちが上演に行くときは、いつも老郎菩薩が守ってくれる。「老郎菩薩」は他の神とは一緒になりたがらないと言われているので、別に祭ることになっていた。今は、「老郎菩薩」の祭り方はちょっと変わって、年越しの時、先祖様などと一緒に祭ることになっている。ただ、来年の仕事がうまくできるように「老郎菩薩、また大晦日になりました、お守りください…」と必ず言わなければならない。

まとめ

今から約80年前の1930、40年代に舟山の沈家門で行われていた人形芝居は、どのように演じられていたのか、芸人たちはどのように暮らしていたのか？本稿は鄭明祥の話を書くことによって、その実態を見てきた。

人形芝居が沈家門で盛んになったのには、沈家門という地域の特徴が関係している。長江の河口と杭州湾の海口に位置する舟山漁場は、世界有数の海洋漁場として知られている。そこでは餌料が豊富で、いろいろな魚が繁殖している。主な水産物には大黃魚（フウセイ）、小黃魚（キグチ）、帶魚（タチウオ）、烏賊（イカ）、鯧魚（マナガツオ）、海鰻（ハモ）、馬鮫魚（サバ）、渡り蟹などがある。春の漁期は小黃魚、夏の漁期は烏賊、秋の漁期は大黃魚、冬の漁期はタチウオである。沈家門は、特に冬のタチウオ漁期に船の集まる場所である⁽²¹⁾。タチウオの漁期になると、沈家門には地元「大対船」⁽²²⁾400組（800艘）のほか、浙江省の寧波や湖州などから来た「大対船」が320組（640艘）、福建省からの「釣冬船」⁽²³⁾は500－600艘に上った。

沈家門周囲の海ではタチウオのほか、小黃魚や烏賊、海鰻、鰻魚もたくさん取れる。



沈家門周囲年間主な漁期図:『舟山市志』(漁業 143-147 頁と舟山市海洋漁業資源分布図)より作成。

それで、沈家門には各地域の漁民の生産や漁獲物の価格の管理、紛争調停などのために、駐在するそれぞれの漁業組合（漁業公所）が9ヶ所あった⁽²⁴⁾。漁民の集まる中心地だったので、商人も集まって来た。学校や銀行、発電所、郵便局、電話会社なども建てられて、生活に便利な場所となった⁽²⁵⁾。

『定海県志』（方俗志第十六・風俗）（1924）には次のように見える。

「極南則沈家門鎮在焉，冬季值魚汎帆樁如林，街衢裏舍鱗次櫛比，學校銀行次第設立，近將自立電燈廠，以利商民。惟東南限於海，西北窘於山，推擴維艱，故有地蹙人稠之感矣。總之，東鄉既獲樹藝之豐，又擅魚鹽之利，除大展張家墩略帶強悍之風，餘率淳良勤朴，各安其業，故昔有福鄉稱也。惟邇年沾染賭風為害滋烈，農嬉於野，商廢於市，舒可慨歎。至沈家門為各地漁民會集之區，湖台溫閩各殊，其幫風澆漓習尚侈靡，娼寮賭場觸目皆是，尤其例外也。」

「(舟山本島の東郷⁽²⁶⁾) 最南端には沈家門鎮があり、冬の漁期になると、(港は)船でいっぱいになる。沈家門には立派な民家がたくさんあり、学校や銀行も次々

と建てられた。最近では民衆のために、発電所を建てることになっている。しかし、沈家門の南東側は海が迫り、北西側は山が迫り、外に広がらないので、土地が狭く人が多く感じられる。全体から見ると、東郷は山の恵みと海の恵みを受けて、少し凶暴の風がある大展の張家墩を除けば、各地の民衆は素朴で安らかに暮らしており、昔から「福郷」と称されていた。しかし、最近では賭け事の悪風がはびこり、農民は田んぼで、商人は市場で賭け事をしており、本当に嘆かわしい。沈家門は湖州・台州・温州（以上浙江省）・福建など様々なところからの漁民が集まってきて、グループを作って軽薄で贅沢な暮らしで、売春宿や賭場があちこちにあり、更にひどくなっている。」

この資料からも1920年代の沈家門は漁業や商業が盛んで、各地の人々がたくさん集まった中心地であったことが分かる。冬の漁期とは、即ちタチウオのことである。このような様々な人が集まってきた場所では、賭け事や売春なども行われた。これは話者が語った「賭戯」「唱班」の背景になっていたと言える。

沈家門は人形芝居の上演にも大きな市場を提供していた。鄭明祥の話によれば、地元の漁民は願解きや人生儀礼のほか、漁の安全や大漁でも人形芝居を頼む。特に大きな漁が終ると、神様に感謝するための「謝洋戯」を行い、その時に人形芝居の戯班を頼む習慣があったという。タチウオと小黄魚が最重要の漁だったので、上述の凶から、「謝洋戯」は、四月上旬と二月初後に行われたと思われる。二月上旬はほぼ旧暦の春節に当たる時期で、年越しの福の祈願で人形芝居を頼むのも理由の一つであろう。また、漁民は休息整備で上陸したとき、人形芝居を頼むことが多く、地元の漁民のほか、福建省の人もよく芝居を頼みに来た。言葉が違おうが、物語が分かるので、語りが分からなくても芝居を楽しむことができるという。

タチウオと小黄魚の主要な漁が終わった後、四月の中、下旬から十月までは比較的に依頼が少なくなり、沈家門の木偶芸人にとっては暇になる時期であった。小さい島に行って注文を取るのには、たいていその時期であった。沈家門には、当時10ヶ所の大きな埠頭があり、寧波の鎮海への便のほか、たくさんの小さい島へ行くこともできた⁽²⁷⁾。鄭明祥の話から、沈家門の木偶芸人は当時、（舞台や道具箱などを担ぎ、）海を渡って普陀山や大樹島、桃花島、六横島、蝦峙島、泗礁島、秀山島、花鳥島などたくさんの島で上演していた。その行く先は沈家

門周囲の島に限らず、ほぼ舟山全域をカバーしていたことが分かる。

人形芝居は人が演じる芝居に比べ、上演者も荷物も少ない。荷物は舞台、道具箱と夜具すべて合わせても約40キロであるので、二人で担いで移動することもできる。当時、小さい島での上演は、人形芝居しか行っていなかった。舟山本島では蘇州の昆劇や安徽の徽劇、紹興・台州の越劇などの戯班が来て芝居を上演することが流行っていたという⁽²⁸⁾が、交通不便で本島以外の小さい島に行くことはほとんどなかった。筆者が2009年、2014年に岱山の長塗島や、嵎泗の緑華島・壁華島などの小さい島で調査した時にも80才以上の老人から「小戯文は見たことがあるが、人が演じる芝居は見たことがない」と言う話を何度も聞いた。

しかし、現在では、舟山で活動している人形座も小さい島への上演はほとんど行ってない。これは漁業の衰退や、特に90年代以後、中国政府の「小島遷、大島建」（大島は整備し、小島は移住させる）という政策により、小さな島の住民がいなくなっているからだ。たくさんの島には80年代後半に建てられた2、3階立ての立派な家が並ぶが、これらはみんな空き家になっていて、今住民はほとんどいない。一方、観光客を呼び込むための旅行村や、石油会社の備蓄所などとして開発された島も多い。

木偶芸人になるためのしきたり、曲芸傀儡協会については稿を改めて検討したい。

註

- (1) 市轄区。中国の行政区画は基本的には省級、地級、県級、郷級という4層の行政区のピラミッド構造から成る。郷級の下には村や社区が設けられている。市轄区は直轄市や大都市（地級市）の市街に設置された県級行政区である。市轄区が他の県級行政区と違うのはそれが都市の中心部分となっている事である。すなわち人口密度が高く流動人口が集中しており、都市人口率は高く、文化・経済・貿易が発達している。
- (2) 本稿は2009年以来数回の調査に基づいて執筆した。日程と場所：（1）2011年8月24日から9月21日および（2）2012年3月7日から3月25日は、話者の家（沈家門茶湾社区638号）と臨城新区深坑嶺の泗洲廟の上演現場（3）2013年8月28日から9月20日と（4）2014年8月25日から9月15日は 話者の家。

- (3) 本稿では年齢はすべて数え年。
- (4) 清以来、江蘇省・浙江省のあたりで流行していた弾き語りで、芸人は座って二胡・琵琶などを弾きながら「西廂記」「白兔記」などを語り歌った。
- (5) 黄色の厚い紙で包んだ贈り物、重要な時に贈る。中身は干した竜眼、干したライチのほか、黒いナツメや赤いナツメなどもある。包みの上には、赤い紙で福など吉祥の文字が書かれている。
- (6) 打楽器の一種、普通二つセットにして使う。一つは紫檀で造られ、「的板」とも呼び、一つは樟で造られ、「篤板」とも呼ばれる。「的」と「篤」は擬音語。三人目の伴奏がいなければ、主伴奏が担当する。また、「篤板」は主演の人形遣いの手前、或は舞台の隅にも置いてあり、伴奏が忙しくて間に合わない時には主演が叩く。
- (7) 定海木偶芸人の侯恵義（1927年生）によれば、舟山の定海区では20年代に、木偶戯同行会があったという。
- (8) 鄭明祥が舞台を造った後、14になった。
- (9) 裁判物として名高い包公劇の一つ。狸にすり替えられた皇子が二十年後、名判官包公のおかげで実の母の李太后と再会する団円劇。
- (10) 連絡係、村人の代表として収金の管理などを行うが、正式な役職ではない。
- (11) 舟山は二期作、晩稲が早稲より品質がいいと言われている。
- (12) 娯楽として上演する場合、連本戯と呼ばれる長い芝居が望まれるのが普通だった。それで、芸人たちは自らの経験から少なくとも三日間上演できると考えた。
- (13) 普陀にある沈家門港は昔から漁船の避難、食物の補給、水産物の運輸などの中心であった。当時、個人で船を持ち運送業を営む者がたくさんいた。鄭明祥の兄もその一人だった。
- (14) コメの品種、赤い斑点を持つのが特徴で、少ししか栽培されていなかった。
- (15) 桃花島の主要農産物はさつま芋である。米の不足をさつま芋で補って、干しイモにして、主食としても食べる。
- (16) 中国古典小説『薛家将』の一つ。『薛家将』は唐の建国を助けた將軍の薛一族、即ち薛仁貴・薛丁山・薛剛の三代にわたる物語である。『薛剛反唐』は薛剛が皇帝の武即天と戦う話である。
- (17) 老板は本来店の主人を言う、ここでは金持ちが頼んだ芝居という意味。
- (18) 「一日一晚」とは、一日2回上演すること。

- (19) 元宵節の灯籠見物で正義漢が娘をさらおうとした権力者のドラ息子を殺し、娘を助けて大騒ぎになるというモチーフである。
- (20) 村、或は民間で呪いによって人の病気を治したり、死んだ人のあの世での暮らしを話す人。
- (21) 『定海県志』(魚鹽志第五・漁業)(1924) 1頁
- (22) 二艘をセットにして網漁をする船。積載量は10 - 20トン。同上2頁
- (23) 釣り漁に用いる船。1艘の「大釣」船と4, 5艘「小釣」船が組になって漁をする。「大釣」の積載量は50トン、「小釣」は30, 40トン。同上2頁
- (24) 同上3 - 5頁
- (25) 『定海県志』(交通志第三・郵信/電報/電話)(1924) 7-9頁
- (26) 現在の普陀区にあたる。
- (27) 『定海県志』(交通志第三・水道)(1924) 2頁
- (28) 『定海県志』(方俗志第十六・風俗)(1924) 41-42頁

参考文献

・志書

陳訓正、馬瀛編(1924)『定海県志』

普陀県志編纂委員会(1991)『普陀県志』浙江人民出版社

舟山市地方志編纂委員会(1992)『舟山市志』浙江人民出版社

・基本資料

馬場英子編(2011)『浙江省舟山の人形芝居一侯家一座と「李三娘(白兔記)」
風響社

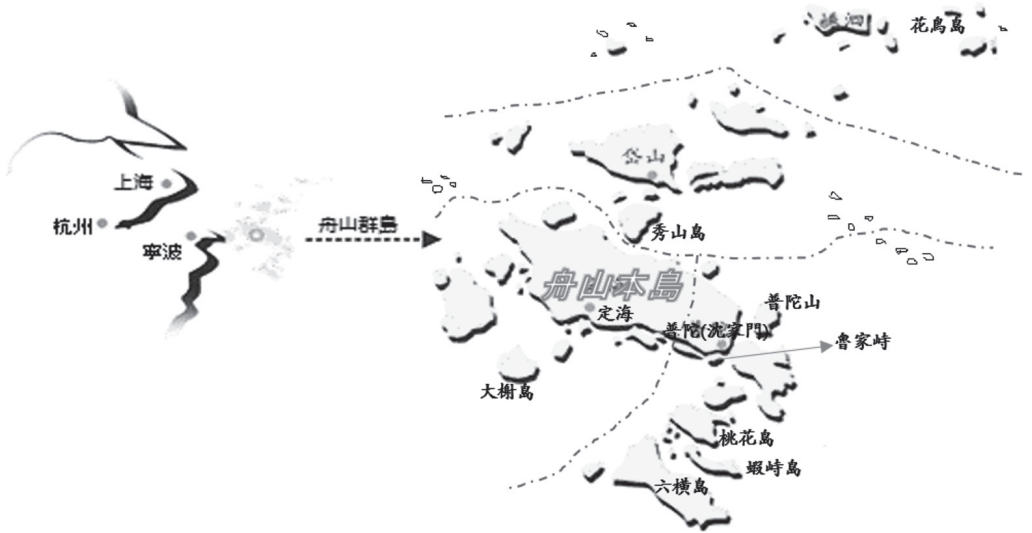
・論文

毛久燕(2014)「中国における民間芸能集団化の試み—舟山群島『東昇木偶
劇団』を例として—」『新潟大学大学院現代社会文化研究』第58号

・その他

中野卓編(1982)『口述の生活史』御茶の水書房

1930、40年代の舟山（沈家門）人形芝居の上演実態



(舟山略図)